

Institute for Language Education
Aichi University, Nagoya

Boken News

No. 15 July 2006



ラオス山間部の製塩所：
塩分の濃い地下水を汲み上げ、塩を作っている。

CONTENTS

- ・『たのしい川べ』とゴダイゴ
 (安藤 聡) 2
- ・『ギリシア・ローマ神話』と現代(1)
 花に変身した美少年たち
 (山田 晶子) 4
- ・60年ぶりに再建なったドレスデンの聖母教会
 (2005年10月30日)
 (島田 了) 6
- ・ウォルマート発祥地ベントンビルを訪れて
 (丸谷雄一郎) 8
- ・The Ceremony of the Keys
 ロンドンで毎夜行われている“鍵の儀式”
 (功刀由紀子) 10
- 海外最新事情 13
 - ・イギリス
 - ・中国
 - ・韓国
- 外国語コンテスト 17
 - ・英語部門
 - ・ドイツ語部門
 - ・フランス語部門
 - ・中国語部門 (法・経営部門)
 - ・中国語部門 (現中部門)
 - ・韓国・朝鮮語部門
 - ・日本語部門
- 外国語コンテスト入賞作 20
 - ・英語部門
 - ・日本語部門

『たのしい川べ』とゴダイゴ

経営学部
安藤 聡

伝説のロックバンド、ゴダイゴが結成30周年を迎えた。ゴダイゴといえば「ガンダーラ」、「モンキー・マジック」、「ビューティフル・ネーム」あるいは「銀河鉄道999」などの一連のヒット曲で70年代末期に一世を風靡したが、実は一方で良質な映画音楽やCM音楽を数多く制作したことも知られている。中上健二の小説『蛇淫』を長谷川和彦が映画化した『青春の殺人者』（1976）や大林宣彦の処女作『ハウス』（1977）の音楽はゴダイゴであった。動物ドキュメンタリー映画『キタキツネ物語』もそうだ。CM音楽の方でもトヨタの「スプリンター・リフトバック」やホンダの「プレリウド」や三菱の「ミラージュ」、サントリーのビールやデルモンテのトマトジュース、森永の「小枝」と「ピーチネクター」、明治製菓のホワイトチョコレート「リリック」、アヲハタのマーメイド、ブラザーのタイプライター、NECのオーディオ機器（というのが昔あった）、ビッグ・ジョンのジーンズ、武田製薬の「ベンザエース」、カネボウ化粧品や味の素など、70年代後半にすでに物心がついていた人なら必ず記憶のどこかに残っているであろうキャッチーなCMソングをいくつも手がけ、CM曲だけを集めたアルバムも二枚出ている。日立の「この木何の木」は長寿CMとして有名だが、これの前の日立グループのイメージ・ソングはゴダイゴの「What Did You Do for Tomorrow」であった。ゴダイゴはビートルズの影響を強く受けていて、ほとんどの曲の歌

詞が英語である。（英国でもアルバムが3枚くらい発売されていて、BBCのヒットチャートでもベスト50入りしたことがあった。）「ガンダーラ」や「ビューティフル・ネーム」なども英語版が最初にあり、後から日本語版がシングル用に録音し直されている。これらの曲もサビは英語のままであり、それだけでも当時としては画期的だったし、私が英語に興味を持ったきっかけのひとつが、他ならぬゴダイゴの音楽だった。ヴォーカルと作曲を担当していたタケカワユキヒデは当時東京外国語大学の英米語学科に在学中だったが、実はその頃まだ日本から一步も出たことがなかったという。この人に感化されて私も、外国には行かずに英語を習得しようと決心し、実際に初めて英国に行ったのはその決心ののち10年も経ってからのことだった。

『たのしい川べ』（1908）はスコットランド出身の童話作家ケネス・グレイアム（1859～1932）の代表作であり、グレイアムが幼年時代を過ごしたテムズ河畔の田園を舞台にモグラや川ネズミ、アナグマやヒキガエルらが繰り広げる物語である。原題は *The Wind in the Willows*、つまり『柳に吹く風』という。グレイアムがこれを書いた頃、すでに彼が育ったクッカム・ディーン周辺は宅地開発が進み、昔日の面影は失われ始めていた。グレイアムが表現しているのは伝統的な風景や生活様式、言い換えれば「過去とのつながり」の価値であり、この作品が書かれた当時はさまざまな意味で大きな変化の過渡期と言うべき時代だったのである。

さて、ゴダイゴのファーストアルバム『新創世記』（1976）は「If You Are Passing by That Way」（日本語タイトルは「思い出を君に託そう）」というフォーク調の幻想的な美しい曲で始まる。英語のタイトルにあるとおり、「もし君がああの田舎道を通るなら、僕の願いを聞いてくれないか、見て来て欲しいんだ」（If you are passing by that way / That piece of countryside / Do me a favour, will ya? / And take a look for me）という歌詞が冒頭にあり、この部分が何度か繰り返される。この歌はこの後

「僕が幼い頃にぶら下がり遊んだ、あの古い柳の木が今でもそびえ立っているか、見て来て欲しい。その木は小川のほとりにあって、小川にはおたまじゃくしがいた。つかまえて大きくなるのを見ようと家に持ち帰ったら、結局死んでしまったんだ。」と続く。幼年時代を過ごした土地を離れて暮らすこの詩の語り手が、その辺りを通りすぎる可能性のある「君」という人物に、想い出深い柳の古木が無事かどうかを確かめて来て欲しい、と言っているのである。この曲は『青春の殺人者』の冒頭でも使われていた。

この曲を私は中学校時代に初めて聴いた。すでにゴダイゴが一世を風靡した後だった。歌詞の英語はそれほど難解ではないし、何よりもメロディとアレンジの美しさに衝撃を受け、繰り返し何度も聴き（当時はCDではなくLPだったので、摩耗による音質の劣化を避けるためカセットにコピーして聴いていた）、この曲に限らずこのアルバム全曲（およびこれに続く数枚のアルバムの曲も）の歌詞をほとんど暗記してしまい、ギターを弾きながら歌っているうちに英語の成績が飛躍的に向上してしまった。この頃ゴダイゴの音楽と出逢っていなかったら、おそらく私は英語教師にはなっていなかったと思う。

「想い出を君に託そう」の歌詞が何処の土地をイメージして書かれたのかを私は知らない。私は丘陵地帯の新興住宅街で育ったので、しかもその住宅街は年々拡大を続けていたので、丘や雑木林が宅地開発されて行く風景の変化を目の当たりにしていた。小川のほとりの柳の木ではなかったが、クワガタやカブトムシがいつもたくさんいるクヌギの木は何本か知っていた。そして、この曲を初めて聴いた当時、すでにそれらの木の何本かは姿を消し、その周辺も住宅地が変わっていた。このような実体験の記憶も手伝って、中学生の拙い英語力でも「想い出を君に託そう」の歌詞に共感することが可能だったのかも知れない。おそらくこの歌詞の主人公は故郷を遠く離れた場所で重病を患い、柳の木を見に行くことが出来ないのであろうと、しかも自分の死期が近いことを自覚してい

るのであろうと、その当時の私は勝手に想像していた。

それから何年か経って、確か大学時代の終わり頃だったと思うが、『たのしい川べ』を読んだときに、ふと「想い出を君に託そう」が脳裏に蘇り、久しぶりにLPを出して来て聴いてみた。その頃ゴダイゴはすでに解散していた。中学校時代にこの曲を聴いていた頃には日本のどこかの風景を思い浮かべていたのだが、いつの間にかこの曲の風景が『たのしい川べ』を読みながら想像していたまだ見ぬイングランドの（とくにテムズ川のほとりの）風景にすり替わっていた。もちろんテムズ川は「小川」ではないし、歌詞の中の「小川」は原文では‘creek’であり、この語を「小川」の意味で使うのは実はアメリカ語法であり、英語の‘creek’は「湿地帯の河口」を意味するということを知ることになるが（このことはジョウン・ロビンソンの『想い出のマーニー』を読んで知った）、その当時は「川べの柳の木」というイメージだけで「想い出を君に託そう」の風景と『たのしい川べ』のそれとが私の中で一致してしまったのだ。

その後、忘れもしない1999年の秋、必要があってグレイアムの生涯について、いろいろな伝記などを読んで調べていた。偶然にもその頃、ゴダイゴは期間限定で再結成していて、そのコンサートの模様を衛星放送で見ることができた。残念なことに、このコンサートで「想い出を君に託そう」は演奏されなかった。と言うよりも私は、この曲をライブ演奏で聴いたことが一度もない。一方でグレイアムの伝記を読んで、エディンバラに生まれたこの作家が幼くして母親と死別し、父親はアルコール依存症でのちに失踪し、グレイアムは兄弟らとともにテムズ川のほとりの祖母の許で育てられ、経済的事情から大学進学を断念してロンドンのイングランド銀行に就職したという事実を知った。だがグレイアムはロンドンでの生活に馴染むことが出来ず、いつもクッカム・ディーンを恋しがっていたという。その頃彼は肺病を患い、また同じ頃に結婚したが夫婦仲は必ずしもうまく行か

なかった。このようなことを知ったとき、私の脳裏にはまた「思い出を君に託そう」が蘇ってきた。かつて想像していたように、自分の死を予期した病人が故郷を想うというイメージではなく、ロンドンで多忙で不幸な日々を送るグレイアムがクッカム・ディーンのテムズ河畔の柳の古木を案じているというイメージが、この詩とメロディから浮かび上がってきたのであった。

グレイアムはその後、クッカム・ディーンに邸宅を購入し、そこからロンドンに通勤するようになるが、この頃クッカム・ディーン界隈に昔の風景を見ることはすでにできなくなっていた。ほどなく彼は健康上の理由もあって銀行を退職し、専業作家となる。その直後に出版された『たのしい川べ』はこの作者にとって、テムズ河畔の失われた風景、すなわち自分の失われた幼年時代を永久保存する試みでもあったのだろう。「思い出を君に託そう」の歌詞が『たのしい川べ』やグレイアムの生涯を念頭に置いて書かれたのか否かは不明だが、この詩とこの童話、そしてこの作者の生涯は私の中で確かに共鳴している。



テムズ河畔の田園風景
(クッカム・ディーン付近)

『ギリシア・ローマ神話』と 現代（１） 花に変身した美少年たち

経営学部

山田 晶子

【はじめに】

今から4000年以上も前のこと、古代のギリシアではキリスト教とは異なった神々が信仰されていた。ギリシアがローマ帝国に征服されると、神々の名前は変わったがその性質はほとんど同じままで、信仰は受け継がれた。キリスト教が支配的になった西暦1世紀頃、この古代ギリシア・ローマの神々への信仰は廃れてしまったが、その神々の物語は『ギリシア・ローマ神話』として21世紀の今まで読み継がれ、世界各国で多くの言語に翻訳され、現代までの文明・文化へ計り知れない程の影響を与えてきた。西洋文明・文化を理解する上で、『ギリシア・ローマ神話』は必須の読み物であり知識の宝庫である。そしてもちろん、これらの物語は東洋・南米・アフリカ・極北への理解にも欠かせないものである。『ギリシア・ローマ神話』の集大成として有名な書物にオウィディウス（Ovid43B.C.~A.D.17?）の『転身物語』（*Metamorphoses*）がある。筆者は学生時代にこの書物の翻訳と出会った。これが初めて邦訳出版された時に、英文学の授業で岩崎宗治先生（シェイクスピア研究の大家）が紹介してくださったので、早速購入して読みふけた（『ギリシア・ローマ神話』そのものは、子供のときから好きで読んでいたが）。素敵な挿絵も魅力的であった。題名が『転身物語』とあるように、『ギリシア・ローマ神話』では、登場する人間が、神々の罰や気まぐれあるいは憐れみからさまざまな植物・動物等の自

然物に姿を変えられた。今回のエッセイでは、人間が美しい花に変えられた物語のうちから、アネモネに変えられたアドニス、水仙に変えられたナルシスの話を紹介したい。

【ヴィーナスに愛された美少年アドニス】

ヴィーナスは愛と美の女神として日本でも広く知られている。歌謡曲の題名にも使われているくらいである。そして絵画や彫刻の題材としても有名である。「ミロのヴィーナス」はルーヴル美術館に入っているが、筆者はパリへ旅行に出かけた昔、それを拝見した。ゆったりとした体つきで、「お母さん」のような包容力を感じさせる姿である。ポッチチェリ (S. Botticelli) の名作「ヴィーナスの誕生」に描かれた初々しい乙女のヴィーナス像とは対照的である。ヴィーナスはラテン名の英語読みであり、ギリシア名はアフロディティである。

さて、ヴィーナスに愛されたアドニスの物語では、ヴィーナスは母親として登場する。息子は「愛の使い」のキューピッドで、ギリシア名はエロスである。キューピッドはラテン名の英語読みである。キューピッドは、「愛の喜びの使い」というよりも「愛の悲しみの使い」と言った方がふさわしいのではないだろうか。と言うのは、キューピッドは金の切っ先の矢と鉛の切っ先の矢の付いた2種類の矢を持っていて、それらを自分の好みで使い分けて、その矢に射られた神や人間を苦しめるのである。たとえば太陽と音楽と薬とスポーツの神として有名なアポロは、キューピッドを怒らせたために鉛の矢を射られて報われない恋に苦しんだ。

そしてヴィーナスとアドニスの物語も悲恋であった。キューピッドの母親であるヴィーナスは、息子を抱きしめたときに金の切っ先の付いた矢で偶然胸を刺されたが、痛くもないので気にしていなかった (キューピッドの矢は射られたときは痛みを感じないのだ)。しかし彼女は、矢で射られた直ぐ後に見た少年、若くて美しいアドニス (多分15.6歳であろう) を見てたちまち恋に落ちてしまっ

たのである (恋は偶然人を襲うのである。意識的に恋をすることはできない)。だがこれはヴィーナスの片思いであった。アドニスはただ狩りに夢中の美少年で、物語ではヴィーナスの側からの呼びかけがあるばかりで、アドニスが彼女を恋しているとは書かれていない。しかし嫌ったとも書かれていない。ヴィーナスが年上であると感じさせる話で、姉のように彼を気遣っているのが分かる。二人の間には性的な関係はなかったような感じである。

ヴィーナスは、イノシシやライオンや熊などの獰猛な獣からは離れているように、とアドニスに注意を与えたが、彼はそんな戒めも気にかけず、あるときイノシシの牙にかかって命を落としてしまう。悲しみにくれたヴィーナスは、その女神としての力によってアドニスの血から赤いアネモネの花を咲かせて彼の思い出を永遠に留めた。女神に愛されると身を変えても永遠の命を授けられるのである。アネモネは春に咲く花で、花屋さんでも売っている。今は赤や紫や白などの様々な花がある。神話ではアネモネはアドニスのはかない一生を思わせるように風が吹くとサッと散る花であるが、現代では品種改良のためか長持ちするようである。

【美しすぎて不幸な恋をした少年ナルシス】

もう一つの悲恋は、これも美しい少年であったためにかえって不幸に見舞われたナルシスの物語である。ナルシスは少年でアドニスと同じく15.6歳であると思われる。彼も狩が好きで少年で、仲間の少年たちと森を駆け回っていた。彼を愛した者は、男女を問わず多かった。しかし彼は誰にも心を動かさず、特に「こだま」の意味として英語に残っている森の妖精エコー (echo) の悲恋は哀れである。彼女はナルシスに恋をしたが振り向いてもらえず、悲しみのあまり体が痩せ細ってついには消えてしまい、声だけが残ったのである。

ナルシスを恋した男女は、報われない恋の苦しみのために、とうとう彼を憎むようになった。そして彼にも自分たちと同じ報われない恋の苦しみ

を味わわせて欲しい、と神に祈った。すると復讐の女神がこれに応えたのである。ある日、ナルシスは静かな森をただ一人さまよっていたが、どういふ訳か道に迷ってしまう。そして洞穴からきれいな清水が湧き出て木陰の下にできた泉までやってくる。喉が渇いていたので、ナルシスは水を飲もうとして泉にかがみ込むと、その表面は鏡のようで、彼の姿が映っていた。しかしナルシスはそれが自身の姿が映ったものとは知らなかった。大昔には鏡の存在がまだなく、神だけが知っていたと思われる。

その結果、ナルシスは水面上の美しい姿に恋をしてしまうのである。自分自身に恋をしたナルシスの悲劇がここに始まった。決して報われない恋であった。彼は水面から動くことができず、とうとうそこで死んでしまう。そして彼を哀れに思った神がいて、死骸から水仙（英語でナーシサス）が咲き出た。ナルシスは水仙の花に変身したのである。現在水仙には約1000種もあり、ラッパ水仙とは異なっている。日本では、越前岬などに咲くもので、一本の茎から白い小さな花がたくさん咲く種を指すと言われる。「自己愛」の意味の「ナルシズム」という言葉はここから生まれたのである。

【終わりに】

以上、花に変身した話を二つ紹介した。考えてみるに、恋は楽しいときは短く苦しいときの方が長いものではないだろうか。恋し愛した人と結ばれてもその喜びは永続しないものだ。永続させるには努力が必要であるし、そのときその愛情は、一瞬に感じた恋の激しい歓喜とは種類が異なったものになる。そして恋とは、意志に関わりなく陥るものであるから、人間の、恋との関係は永遠に続くものである。そして芸術の永遠の源となるのである。

参考：オウィディウス著 田中秀央/前田敬作訳『転身物語』、人文書院、1966年

60年ぶりに再建なった ドレスデンの聖母教会 (2005年10月30日)

経営学部

島田 了

エルベ河畔のフィレンツェと呼ばれる芸術の街ドレスデンにひときわ目立つ建築物があった。プロテスタントの聖母教会である。当時の教会の丸屋根は木組みに銅版をかぶせたものが普通であったが、この教会は丸屋根全体が明るい色の砂岩でできあがっていたのだ。この教会を設計したのはドレスデンの大工長ゲオルク・ベアー、設計当時57歳で経験は豊富だったが、ほとんど無名の建築家だった。彼についてはほとんど資料が残っておらず、肖像画さえ残っていないという。実際、彼に設計を任せるにあたって反対もあったし、妨害もあった。設計が彼に決まってからも、石の丸天井については反対が多かった。しかし彼は粘り強く交渉を続けるなどして、石の丸天井を決してあきらめなかった。そして資金難にも負けず、彼は私財を投じて教会の完成へと努力した。結局、彼は完成前の1738年3月16日に貧困のうちに息を引き取ることになる。しかし彼の主張どおりの石造りの丸屋根は完成し、1743年5月23日の完成以後、その美しくも堂々たる姿から「太った貴婦人」(dicke Dame)の愛称でドレスデンの人々に愛され続けてきたのだった。

この教会は、7年戦争やナポレオン戦争、そして第1次世界大戦にも被害にあわなかった。第2次世界大戦も末期になって、ベルリン、ケルン、ハンブルク、フランクフルトなど他の多くの大都市が爆撃で壊滅的な被害を受けていたときでも、ほとんど被害を受けていなかったのである。

ドレスデンはその文化的価値の高さから爆撃をまぬがれているのではないかと、当時の人びとは思い始めていた。戦闘が激しさを増す東部からは多くの難民が、安全と信じていたこの街に殺到していた。しかしこの美しいバロックの街ドレスデン、その歴史を通じて平和を愛したザクセンの首都も例外ではありえなかった、1945年2月13日、そんな無防備に近い街を連合軍の爆撃機は襲った、第1波は244機、第2波は529機のランカスター爆撃機である。歴史に名高いドレスデン大空襲であった。爆弾による破壊と焼夷弾による大火災で街は一夜にして壊滅し、民間人の死者は2万5千人とも3万5千人ともいわれている。そして人命とともに多くの貴重な文化遺産も消えていった。

聖母教会も例外ではなかった。直接の爆撃はまぬがれたものの、1000度ともいわれる火災の熱を受けた砂岩はもろくなっていた、2日間は持ちこたえたものの、力尽きたかのように丸屋根はゆっくりと崩れ落ちていった。教会の後には焼け焦げた瓦礫の山が遺された。

戦後、多くの都市でドイツ人は街を再建するにあたって瓦礫を一つ一つ拾い集め、可能な限り元通りに再建していった。世界遺産に指定されているリューベックの古い町並みや、観光客に人気のローテンブルクなど多くの街が長い年月をかけてこのように再建されていったものである。ドレスデンのバロック建築の街並みも、ゆっくりとであるが同様に再建されていった。しかし、聖母教会はいつまでも瓦礫のままだった。一つは戦争の悲惨さを後世に伝えるため、もう一つは当時の社会主義政権が教会に対して弾圧にも近い立場をとっていたことがその理由である。

聖母教会の悲劇は戦後も続いていたのである。その困難の中で人々は再建にそなえ、瓦礫を保存し、丹念に記録を集め保管した。そして50年もの歳月が過ぎようとしていた1994年になって、統一後の新しいドイツのもとで再建が始まることになった。多くの街で行なわれた執念ともいえる再現への情熱がここでも見られた。さらに最新の技術が投入された。たとえば、コンピュータによるシミュ



再建なったドレスデンの聖母教会



瓦礫の山のまま残された聖母教会、1984年2月13日のドレスデン空襲39周年に行われた平和のためのデモに12万人もの人々が参加した。

レーションで、一つ一つの瓦礫の落下の道筋が計算され、元の位置が注意深く決められていった。

またメディアの協力も大きかった。ドイツのテレビ局は「聖母教会のために石材を一つ（もともと石材には寄付の意味もある）」や「市民があなたの街を救う」などのコピーを使い、特集番組を作るなどして広く寄付を呼びかけた。この運動にドレスデン市民だけでなく、世界中の人々が注目し、多くの寄付が寄せられた。かつての敵国、ドレスデン空襲の張本人であるイギリスからの寄付の申し出もあった。現在丸屋根の頂点に立っ

る十字架は、このイギリスの寄付によるもので、和解の意を込めて「平和の十字架」と呼ばれている。そしてイギリスでこの十字架作成に携わった職人にアラン・スミスという人物がいたが、奇しくも彼の父はドレスデン空襲当時のパイロットだったという。

資金は決して潤沢とはいえなかったし、2002年にはエルベ川の洪水による浸水を受けたりもした。しかし多くの人びとの協力により工事は順調に進んでいった。2003年に鐘の鑄造がおこなわれ、2万5000人もの人々が式典に参加した。2004年には地上61mの高さの丸屋根の頂点に十字架が置かれた。内装の壁画は、工事の騒音を避けて深夜に描かれた。こうした人々の努力により、予算の超過もなく、当初の予定よりも1年早く完成し、2005年10月30日に聖母教会落成の大式典がおこなわれたのである。プロテスタントの教会としては珍しく華麗な内装で飾られた聖堂内に、完成を喜ぶ人々と美しい音楽が満ち満ちた様子がメディアで中継され、聖堂内に納まりきれない人々は広場でこの中継を見ていた。その映像には涙ぐむ人も多かった。

当時カトリックの国だったザクセンでは異例の豪華なプロテスタントの教会は、かつては「寛容の象徴」だった。今この教会は新しい時代のドイツにおける人びとの「和解と連帯の象徴」となることだろう。

ウォルマート発祥地 ベントンビルを訪れて

経営学部
丸谷雄一郎

ウォルマートは大手スーパー西友を傘下に有する2004年時点で世界最大の売上高2,852億ドルを誇る小売業者である。私は10年以上に渡りメキシコの小売産業を研究対象としてきたが、メキシコにおいても現地資本の小売業者最大手3社を合わせた売上高を凌ぐ最大の小売業者となっている。私はウォルマートを研究対象にして以降メキシコ各地、米国国内、中国など世界のウォルマートを訪れてきたが、その発祥の地であるベントンビルを訪れたいと考えてきた。しかし、ベントンビルはウォルマートの発祥地である以外目立った特徴もない南部の田舎町であり、ついでにちょっとという場所ではないため、これまで訪ねることができなかった。2006年2月24日、10年来の悲願の1つが達成されたわけである。

ベントンビルはクリントン前大統領が知事をしていた南部の小州アーカンソー州の北西にある酪農など一次産業中心の典型的田舎町である。ウォルマート成功の主な要因は、人口の少ない田舎の市場を独占していることであるが（詳細は、拙著『変貌するメキシコ小売産業』白桃書房、2003年を参照）、ベントンビルはまさにウォルマートが標的としている田舎町の典型であり、ウォルマートのおかげで現在は空港や道も整備されてはいるが、おそらく当時は現在以上の田舎であったとみられる。ウォルマートのこの戦略を模倣している日本の小売業者も数社あるのだが、彼らが主に开店しているのは北陸山陰などのいわゆる過疎地域

であり、名古屋近辺では岐阜県瑞穂市を思い浮かべてもらえればわかりやすいだろう。

日本からの場合、当然ベントンビルへの直行便はなく、ヒューストンかメンフィスといった南部の主要空港で小型のジェット機に乗り換えて向かうことになる。私は今回その他の研究の関係でワシントンDCを拠点にしていたのだが、ワシントンDC発早朝便でヒューストンを經由し、ベントンビル近くの空港（ノースウエスト・アーカンソー・リージョナル空港）へ午後3時頃到着した。ベントンビルへの飛行機には、ウォルマート関係者が多く見られ、隣に座った白人の男性に「西友の関係者か？（なお、西友はウォルマートの子会社である）？」聞かれて驚いた。おそらく、研修などで西友の社員がベントンビルを訪れているのだろう。ベントンビルの空港は小奇麗ではあるが、典型的な地方空港であり、乗り口も数箇所までこれまでアメリカで行ったどの空港よりも小さかった。

空港の外に出て、ホテルに電話し送迎を頼んだのだが、かなり年配の男性の運転するバンが20分ほど待って到着した。空港からホテルは15分ほどだが、まさに北海道という感じの大地が広がり、ウォルマートの巨大ロジスティクスセンター以外はしばらく何もなく、周りには放牧地が続いていた。走っている車もウォルマート関係の大型トラックが多く、「企業城下町ベントンビル」という実感がわいてきた。10分ほど走った後、突如ウォルマート関係者向けと思われる住宅地がみられるようになり、ファストフードのチェーン店や量販店チェーンが入るモールが市街地にはみられ、それを横目にホテルに到着した。

現地の状況が事前にほとんどわからなかったので、ホテルで聞いたタクシー会社の連絡先を聞いて電話してみた。しかし、回答はなく、クライスラーの大型車をレンタカー屋で借り翌日に備えることにした（小型車がよかったのだが、なかったのだ）。レンタカー屋に行くと、隣がウォルマートの本社であり、本社の雰囲気は巨大駐車場には多くの車の出入りがあり活気はあった。しかし、その造りはアメリカの高校といったレンガ造りで

非常に質素であり、コストカットの象徴としてそびえたっていた。

翌日は早朝5時半からベントンビルから自動車です15分程度のロジャースにあるウォルマートの1号店（現在はディスカウントストアと食品スーパーが一緒になった業態「スーパーセンター」となっている）と全米でもそれほど数は多くないが、今後出店の増加が予測される日本の食品スーパーに近い業態「ネイバーフッドマーケット」の店舗を見学した後、「ウォルマートビジターセンター」を訪れた。

ビジターセンターはウォルマートの創業者であるサム・ウォルトン氏がウォルマート開業前に経営していたバラエティストア（100円ショップをイメージすると近い業態）の店舗の概観を残し、その中をウォルマートの発展の経緯やサム・ウォルトンの人柄がわかるミュージアムとして開放している。ビジターセンターの入館は無料であるが、営業時間が火曜～土曜の9時～5時である。

到着したのがまだ9時前だったので、センターの周辺を歩くときれいに整理はされてあるものの活気はなく、センターの隣はアートショップ、その横はカフェであり、その斜め裏の食品スーパーは薄暗く、前のベントンビルスクエアと裏の教会だけがきれいに目立っていた。

9時になり入館すると、多くのウォルマート関係者とみられる人達や観光客が既に見学しており、陽気な事務のおばさんが迎えてくれ、ビジターセンターの冊子と「サムズルール ビジネスを構築していくために」という冊子をくれた。正面は昔使われていたレジや棚が展示され、センターのグッズが多く販売されていた。その奥に進むと、ウォルマートの発展の歴史が新聞記事や写真、上場当時の株式などとともに展示されており、奥ではウォルマートの歴史に関する簡単なビデオを放映していた。さらに左へ曲がって進むとサム・ウォルトンの執務室が再現されており、その質素さが垣間見られた。そして、左横の別の部屋に進むと、海外のウォルマートの状況の紹介がなされており、土産物コーナーの横の手前に戻るとサムが狩猟に

愛用していたピックアップトラックが飾られており、そのトラックの横にはカーター元大統領や家族との写真が飾られ、最後にはサムの妻ヘレンを中心とした社会貢献活動が示されていた。

創業者サムの逝去後、ウォルマートの評判は出店予定地近隣の商店や地元自治体の消費者からの反対運動やアソシエイツと呼ばれる社員に対する待遇の低さなどによって低下している。誕生50年を経て、ネガティブな側面が目立ってきているとはいえ、ベントンビルを訪れ、その原点に触れてみると、アメリカのど田舎から世界的な大企業を生み出したサム・ウォルトンの実直さが垣間見られた。そして、彼がこの田舎から一生離れず、都会の雑音を遮断して、すべての無駄をなくし、「エブリデイ・ロー・プライス（毎日低価格）」のために全精力を傾けたからこそ成功できたことが実感できた。そういった意味では、ウォルマートは地元名古屋を離れず地域とともに発展したトヨタと近いDNAを持つ企業といえるだろう。

わざわざ訪れるのは難しいだろうが、アメリカ南部を訪れる機会がある方はぜひ訪れることをお勧めしたい場所である。



ベントンビルウォルマートの前身であるバラエティストア（現在のウォルマートビジターセンター）にて

The Ceremony of the Keys ロンドンで毎夜行われている“鍵の儀式”

経営学部
功刀由紀子

ロンドン観光の名物といえば、バッキンガム宮殿前で繰り広げられる衛兵交代の儀式を挙げる人は多いことでしょう。その華やかなパフォーマンスは、見物の観光客を魅了してやまない儀式です。この楽しい儀式とは打って変わり、夜のロンドンで秘かに、でも約700年の長きにわたって一日も欠かさず続けられている儀式があります。場所はロンドン塔。ロンドンを守る要塞として、20年間を費やして建てられたロンドン塔は、王室の宮殿でありながら政治犯を収容、処刑するための牢獄としても使用され、特に王位継承に関わる処刑、暗殺、幽閉といった血なまぐさい歴史で有名な観光名所の一つでもあります。

このロンドン塔で毎夜行われている“鍵の儀式（The Ceremony of the Keys）”とは、どのような儀式なのでしょう。実はこの儀式にも、バッキンガム宮殿前の儀式同様、女王陛下の衛兵が参加しています。そして参加者はもう一人、ロンドン塔といえばおなじみの Yeoman Warder（王室直属の看守とでも和訳するのでしょうか）、“Beef Eater”の愛称でおなじみであり、赤と黒のチェダー王朝風の衣装に身を包んだおじさんです。

では、700年の歴史を誇る“The Ceremony of the Keys”を再現してみましょう。始まりは毎夜きっかり午後9時53分、そして終わりは毎夜午後10時ちょうど、つまりたった7分間の短い儀式なのです。

午後9時53分、一人の Yeoman Warder が片手

に灯の入ったランタン、もう一方の手には大きな鍵束を持ってロンドン塔の本館（White Hall）前の道を歩いてきます。するとそこに6人の衛兵が銃を持って待ち構えています。そして衛兵の一人がランタンを受け取った後、Yeoman Warderを取り囲むようにして「The keys をエスコート」し、ロンドン塔と外部をつなぐ通路に向かって行きます。通路の扉、つまりロンドン塔への入口とWhite Hallの正面入口の扉に鍵をかけた後、6人の衛兵とYeoman Warderは「The keys をエスコート」した場所に戻って行くのですがその途中で、銃を構えた1人の衛兵に遭遇します。この衛兵は、「The keys をエスコート」した6名の衛兵と1人のYeoman Warderの足音を聞きつけ、何しろ漆黒の闇の中、不審人物の侵入と勘違いし、銃を構えながら次のように声をかけます。

「Halt.」するとThe Keysのエスコート隊は歩みを止めます。続く短い応答は大変興味深い内容です。

「Who comes there?」ここで「Who goes there?」ではないことに注目してください！

「The Keys.」 「Who」との質問に、「The Keys」と答えています。

「Who's Keys?」どこの鍵ではなく、だれの鍵と聞いています。

「Queen Elizabeth's Keys.」これは、現在エリザベス女王が即位しているための答えです。

「Pass Queen Elizabeth's Keys. All's well.」

そして質問をした衛兵はその場から去って行きます。一方、The Keysのエスコート隊が元の場所に戻ってくると、そこには交代の衛兵が隊列を組んで待っています。Yeoman Warderは手にした鍵束を衛兵の隊長に渡し、二言、三言言葉を交わします。これは残念ながら聞き取れませんが、最後に全員で「アーメン」と唱えたようです。そしてbugle（軍隊で使うラッパ）が緩やかなメロディーを奏で儀式は終わります。このラッパを吹く時刻が、ちょうど午後10時なのです。

このような7分間の短い儀式が、約700年間毎夜ロンドン塔で執り行われているのです。ロンド

ン塔自体は、ウィリアム征服王（William the Conqueror）により約1000年前に建てられたものであり、この“The Ceremony of the Keys”は建てられてから300年程のちから始められたようです。しかし、始められた由来は定かではないのです。ただ、当初はロンドンを守る要塞であったものが、王室の宮殿として使われるようになり、王室の財宝や絵画、彫像などが運び込まれるようになりました。さらに、政治犯の牢獄として使用されるようになり、ロンドン塔の安全面、つまりは財宝の盗難防止と政治犯の逃亡防止のために、夜間はロンドン塔のすべての扉に鍵をかける必要に迫られたということのようです。

夜間にYeoman Warderがロンドン塔のすべての扉に鍵をかけるだけのことならば、このように様式化した儀式にすることもないように思うのです。聞くところによると、鍵をかけることになった当初は時刻も決っていなかったため、ロンドン市内に出掛けていた衛兵がロンドン塔から締め出されることが頻繁に起こったということです。そのため、1826年当時ロンドン塔の城守であったウエリントン公爵（the Duke of Wellington）は、施錠時刻を午後10時と定め、衛兵はその時刻までに全員ロンドン塔内に戻るように決めました。しかもこの午後10時という時刻を、昼間と夜間の衛兵交代の時刻とし、“The Ceremony of the Keys”の最後に奏でられるラッパのメロディーを、すべ



“鍵の儀式”とは全く無関係ですが…。ロンドンの街中を牛が走る？ いえいえ、無添加、無香料の乳飲料を製造している企業、その名も“innocent”の車でした。

での扉に施錠し昼間の護衛は終了したという衛兵交代の合図としたわけです。

となると、7分間の中で繰り広げられる短いドラマは、700年間の歴史の中で遭遇したエピソードを様式化したものであると推測され、このような様式化されたエピソードも含めて衛兵交代を儀式化したと考えられます。

ところでこの儀式、筆者は全く知らなかったのです。去る3月研究目的で、イギリス農務省や消費者団体に聞き取り調査を行うためロンドンに出掛けました。その際、消費者団体に関わっていた方の招待により、この珍しい儀式を知ることができたのです。この儀式は一般公開されているとはいえ、夜間であり、さらにロンドン塔内の狭い場所が舞台であるため、一晚20~30名程度の事前予約による見学を受け付けているようです。興味のある方は、ロンドン塔事務所に手紙で予約をすると受け付けてもらえるとのことでした。ちなみに、現在の待ち時間は約6ヶ月とのことでした。

では筆者が招待されたとはどのようなルートか、ですか？ それは、Yeoman Warder に知人がいれば、いとも簡単に見学できるということです。ロンドン塔の敷地内に、Yeoman Warder 専用のパブがあり、このパブの客は、事前予約見学とは別に見学させてもらえるという特権を持っているのです。

鍵の儀式を見終えてロンドン塔を去るとき、迷彩服に身を包み、銃をしっかりと抱え周囲を窺いながら足早に立ち去るグリーンベレーの青年数名とすれ違いました。今もイラクに派兵している英国は、爆破テロ対策にも気を配っています。今現在、ロンドン塔を警護しているのは、熊皮の帽子をかぶった衛兵ではなく、グリーンベレーの彼らなのです。彼らの警護下、毎晩絶えることなく行われている衛兵交替と施錠の儀式“The Ceremony of the Keys”は、歴史と伝統を重んずる英国文化の象徴といえるでしょう。しかしながら、国際社会の現状と比較したとき、そこに違和感を覚えるのは筆者だけでしょうか？

(海外最新事情)

イギリス

(1) パブ禁煙化続報

前回ここにイングランドのパブの禁煙化についての記事を書いたが、その後またこの問題をめぐる動きがあったので、その続報を記す。前は2007年夏からイングランドのパブは「部分的に」禁煙化されるという決定がなされたところまでお知らせした。

この決定に関しては、一切の例外を認めず全面的に禁煙化すべきとの声も強かったのだが、労働党のマニフェストに書かれていたとおり、飲み物しか提供しないパブと会員制クラブには禁煙法案を適用しない、ということになった。だがその後、世論ばかりでなく労働党の内部からもこの決定に異を唱える声が上がリ、結局は議会で自由投票 (free vote: 党の決定に関係なく議員が個人の意味を表明する投票) が行われることになった。

この投票は2006年2月14日に行われた。翌日の『タイムズ』によれば全面禁煙化に賛成が384票、反対が184票と、見事に200票差だった。当初は全面禁煙化に反対していたブレア首相も結局は賛成に投票したという。『タイムズ』には反対に投票した主な議員の名前が公表されている。この法案はこの後、夏頃までに上院で可決され、2007年夏から施行される見通しとのことである。この法案にはまた、煙草を購入できる年齢を16歳から18歳に引き上げることも含まれている。

スコットランドでは今年の5月26日から全面禁煙化される予定と前回書いたが、これも予定を早めて去る3月26日から実施された。27日の『タイムズ』によれば、禁煙化初日は「大した怨恨も抗議行動もなく過ぎた」とのことだ。この日スコッ

トランド西部では雨が続いたため、パブの外に出て喫煙するよりは中で我慢する喫煙者が多かったが、エディンバラでは比較的好天だったので、表で煙草に点火する喫煙者の姿が見られた、とのことである。国境に近い地方ではイングランドのパブまで遠征する愛煙家も今後増えることが予想され、イングランド側のパブが売り上げ増加を期待しているらしい。

自由投票が行われた日の『インディペンデント』には英国の煙草事情についての記事もあった。成人人口の4分の1が喫煙者で、これは30年前の半分になっている。一方で最も喫煙率が高いのは20~24歳で、男性38パーセント、女性34パーセントである。また15~16歳の少女の3人に1人が喫煙者という俄に信じがたい数値も示されていた。英国では煙草一箱がおよそ4ポンド80ペンス (約1000円) で、このうち3ポンド84ペンス (約806円) が税金である。そして英国全体で年間およそ10万人が喫煙が原因となる病気で死んでいる。なお、英国では煙草の箱に「喫煙は死をもたらす。」 (Smoking kills.) という警告文を記載することが義務づけられている。

(2) 別荘が村を滅ぼすということ

イングランド南西部のコーンウォール半島や北西部の湖水地方 (the Lake District) はその風景の美しさで人気を博し、これらの地域に別荘を所有することを望む人々も多い。だがそのために不動産価格が急騰し、このような地域に本宅を購入したくても出来ない人々が増加しているという問題もある。また、別荘を所有する人々は一年のうちごく短期間しかそこにいないため、それ以外の時期にはゴーストタウンと化してしまい、学校や

病院が閉鎖に追いやられるであろうことも危惧されている。

そこで、別荘の購入を制限すること（販売許可制度の導入）と、別荘に特別に課税することによって、人気の地域の通常の住民の割合を高めようとする動きがある。2006年5月18日の『タイムズ』によると、このような景勝地のうち別荘が40%から50%を占める町や村に関しては、別荘として販売する戸数にある程度の制限を設けることが議会で検討されているという。また「長期不在税」（absenteeism tax）というような税を新設し、年間の不在期間の長さに応じてその別荘に課税するという案も提示されている。

この記事には英国の地域別の別荘が占める割合が記されているが、それによると意外なことに第一位はロンドンのシティ（金融街）でおよそ27.2%、続いてシシリー島が21.5%である。よく考えてみれば、シティが一位なのは裕福な金融関係者がカントリーサイドに本宅を構えて仕事場としてフラットなどを購入するからであり、またシティに住む通常の住民は極めて少ないからであろう。ここはこのように特殊な地域なのだから別荘率が高くともとくに問題はない。以下デヴォン州南東部、ノーフォーク州北部、コーンウォール州北部、ノーサンバーランド州のベリック・アボン・トゥイド、ロンドンのウェストミンスター地区が10%前後と続く。そしてロンドンのケンジントンとチェルシー、コーンウォール州のペンウィズ、そして湖水地方南部が8%前後とのことだ。これらの数値は（シティ以外）ある程度広い範囲の平均であり、とくに人気のある村になると先に触れたように40%から50%に達するところもある。古い趣のある村がとりわけ好まれていることは言うまでもない。そういった地域の不動産価格の平均は都市部のそれよりも19%も高いという。

（安藤 聡）

中国

北京ではまた土が降った。

「北京又下土了。〈Běijīng yòu xiàtǔ le.〉」——今年の春、北京で話題となった言葉だそう。 「下xià」は、「降る」という意の動詞。中国語で「雨が降る」ことを、「下雨 xiàyǔ」と言う。「下土 xiàtǔ」とは、この「下雨 xiàyǔ」という言葉を基にして新たに造られた言葉で、「土が降る」という意を表す。「又～了」は、「また～した」の意。同じ動作や事態が繰り返し発生することを表す。これらの語釈を踏まえて、冒頭の言葉を解釈すると、「北京ではまた土が降った。」となる。

雨が非常に強く降ることを「土砂降り」と比喩を用いて表現することがあるが、今年の春、北京をはじめ中国北方の省や市では、本物の土や砂が雨のように空から降ってきたとのこと。その土や砂はいったいどこからやって来たのかといえば、中国の西北に位置するゴビ砂漠やタクラマカン砂漠、あるいは黄土地帯の砂塵が強風に舞い上がり、さらにそれが偏西風に乗って東へ運ばれ、北京をはじめ中国北方の省や市に降り注いだのだそう。砂塵のなかでも粒子の細かいものは、さらに風に乗って遥か遠く日本にまでやってきた。いわゆる「黄砂」である。

こうした現象そのものは春になれば毎年みられる、いわば春の風物詩の一つであり、とりわけ珍しいものではない。ところが今年の場合は、降った砂塵の量が尋常ではなく、例えば北京では、四月十六日から十七日正午までに降った砂塵の総量が、33万トンにも達したそう。

中国では砂塵が降るこうした天候を「沙尘天气 shāchén tiānqì」と呼び、特に程度が激しく人々に甚大な被害をもたらすものを「沙尘暴 shāchén bào」と呼んでいるようだ。「沙shā」は、「砂」に同じ。「尘chén」は、「塵」の簡体字。「小+土（小さい+土=ちり）」という、いわゆる会意文字の原理を利用して作られている。この春の「沙尘天气」の特徴は、降り注ぐ砂塵の量の異常さもさ

ることながら、発生回数も増加し、被害範囲もまた拡大傾向にあるようで、北京や天津など14の省や市、面積にして400万平方キロメートルにも及んだという。例年になく激しさを増しているのだ。

「沙尘天气」の程度が激化した主な原因として、中国の西北地方における著しい砂漠化の進行が挙げられよう。ではそもそもなぜ砂漠化が進むのか。一説によれば、どうやら羊の放牧に原因があるらしい。羊は草を食べるが、表面の草だけではなく、根まで食べてしまうのだそうだ。まさに「根こそぎ」食い尽くすのである。根さえ残れば草はまでも再生するが、根まで食い尽くされると、草はもはや再生することはなく、結果として砂漠化がどんどん進むことになる。そして、砂塵の供給地となる砂漠面積が増えれば増えるほど、当然のごとく、降り注ぐ砂塵の量も増え、被害範囲も拡大することになるのである。

「北京又下土了。〈Běijīng yòu xiàtǔ le.〉」——取り除いても取り除いても、空から降り注ぐ砂塵。ここでの「又～了」という表現からは、「ああ、またか」という、北京の人々のうんざりする気持ちが読み取れるであろう。 (矢田博士)

韓国

キティーママ

我が国は、津々浦々まであのネコ人形キティーの支配下に置かれたしまったのであろうか。どこへ行っても、ご当地キティーにご対面とあいなる。鹿児島へ行けばキティーが桜島大根を抱えて宣伝ガール、福岡では明太子に乗ったキティーが中洲（飲み屋がいっぱいある繁華街です）へご招待、岡山では桃太郎キティーがきびだんごのご接待、京都の名物といえば八ツ橋、その八ツ橋のお隣で舞子キティーが「おいでやす」、名古屋に帰れば金のしゃちほこやエビフライに乗ったキティーが「やっとながめだなも」。安くもないキティー、いったいサンリオのもうけはいかほど？

そのキティー、韓国へ行けば韓国服姿で出迎え



てくれる。韓国もキティーに乗っ取られたのか、とうとうキティ맘（キティーマムと読みます）なる新語まで登場した。これは、Kitty Momをハングル表記したもので、日本語にすれば「キティーママ」となる。

このキティーママ世代、いまや韓国で消費の中心となり、モノを売る側、サービスを提供する側はこの世代にいかにかアピールするか腐心し、そのアドバイスをWebサイトまで登場している。いま、キティーママ「世代」と書いたが、1971年から1980年までに生まれた世代を指す。キティー人形で育ち、いまやママとなった20才代後半から30才代前半までの世代である。この世代のママさんたち、ほかの世代の女性とはすこし、というかずいぶん、思考様式、生活様式、行動様式が違うのである。

まず第一に、学歴が高い。専門大学卒以上の学歴をもつ女性は全体で25%なのに対し、この世代は53.6%にも上る。高度経済成長期に生まれたこのキティーママ世代は、60年代に生まれた世代とは違って幼い頃から私教育を受けて育ち、「教育は力なり」の信念のもと、子供を一流塾に通わせるために郊外の家を売り払ってソウル市内江南区の賃貸マンションに引っ越すなどの行動をとる。しかし、ただだんに最高の成績を求めるのではなく、子供を旅行に連れて行くなどして、広く世間を見させ、多様な経験をさせたいとも考えている。

第二に、高級品を好むが、同時に合理的な消費性向を持っているという。たとえば、質を重視し、子供の化粧品には有機農産品を、入浴用品には高

級外国製品を使い、ブランド物にもこだわるが、割引セールなどをうまく利用する。

第三の特徴は、積極的な社会参加である。キティーママ世代と同じ20代後半から30代前半の女性の経済活動参加率は、1983年の38.5%から2003年の55.3%に増加。キティーママたちのベンチャー企業進出も本格化し、2005年には、ベンチャー企業を経営する女性321人のうち、キティーママ世代が40人を占めたという。政治への参加も積極的で、子女教育の問題や女性差別解消などについて声をあげ、また、たとえば2004年にあった総選挙では、キティーママ世代の投票率は同世代男性の投票率を上回ったという。

経済活動参加率と関係するが、年間2500万ウォン（日本円にして約300万円）以上の年間所得を得ている女性は、全体で32.3%に対してキティーママ世代は35.7%である。このようなわけで、生活満足度が全体の31.4%に対して40.5%であるのも納得できようというもの。

合理的側面を備えたこの世代のママさんたち、人間関係についてもうまく立ち回り、たとえば、夫の両親とも摩擦のない温かな関係を築いているという。

参考までに、広告代理会社6社が共同で行なった家族観についてのアンケート調査結果の一部を紹介しておく。

項目	キティーママ世代	主婦全体
趣味活動を家族とともにする	40.7%	33.4%
父母の世代を尊敬する	61.4%	60.2%
共稼ぎをしても家事は主婦の責任である	23%	30.3%
息子は必ずいなければいけない	29.4%	40.1%

最後に付け加えておくと、キティーママと同じ世代でも、当然ながら、経済的にも上で紹介したママさんたちのようなわけにはいかない主婦もいる。その人たちは、子供たちのために食堂などでアルバイトをしなければならず、웨이트니스맘(ウェイツリスマムと読みます)、つまり「ウエー

トレスママ」と呼ばれているそうである。

(付記) この文を書くにあたって、2006年1月に東亞日報のホームページの中の「デジタルストーリー-디지털스토리」で連載された記事を参考にしました。
(田川光照)

第10回 外国語コンテスト

英語部門

2005年度外国語コンテスト・英語部門は11月29日に行われた。参加者は前年度をやや上回る8名だった。課題は前年と同様、自作の英文を覚えてきて発表するというもので、今回も非常に優れたスピーチが集まったのではないかと思う。審査員は例年通り、本学名誉教授の池稔氏と法学部教授のジョン・ハミルトン氏に担当して頂いた。

上位入賞者のうち、第1位の白鷺さんは昨年、一昨年に引き続き三年連続の優勝であり、内容は彼女自身のお母さんについてのものだった。ユーモア溢れる語り口で聴衆の笑いを誘いつつも、同時にお母さんに対する深い尊敬と愛情の感じられる、素晴らしいスピーチだったと思う。

第2位の杉本藍さんと第3位の佐々木泰司君は、たまたま2人とも自身のカナダでの体験について述べた内容のスピーチだった。杉本さんのものは、初めての海外体験としてのカナダでのホームステイの思い出についてである。言葉の壁に苦しみつつも、ホストファミリーの暖かい態度に励まされたという内容で、これからホームステイを考えている人たちには、とてもよい参考になったのではないだろうか。佐々木君のものは、カナダの農場での辛い仕事のことや職を見つけようと苦労した体験についてであり、かなりユニークで興味深い内容だったと思う。 (多田哲也)

ドイツ語部門

2005年度の名古屋語学教育研究室主催第11回外国語コンテスト・ドイツ語部門の本選が、2005年12月6日(火曜日)の午後4時40分より名古屋校舎中央教室棟211教室でおこなわれました。その

結果を簡単にですが、報告したいと思います。

今回は、ドイツ語の統一テキスト „Lernziel Deutsch. Grundstufe 1.“ の Reihe 12 の Text A „Welche Ausbildung haben Sie?“ の前半を課題に選びました。これはドイツの教育制度に関するインタビューを再現したテキストです。このテキストに関していえば、文法はそれほど難しいものではありませんが、教育制度に関する専門的な用語が多く、なかでも外来語に由来する単語も多く、アクセントの位置が特異な点など発音等に注意が必要なものです。参加者にとって念入りな準備が必要な課題となりましたが、参加者は例年を大きく上回り19名もの参加者がありました。

審査にあたったのは、ドイツ語担当教員である法学部所属の竹中克英先生と経営学部所属の私(島田了)の二人で、表現力と発音・アクセントの合計点で審査を行いました。

すでに述べたように、内容としては決して簡単ではないテキストにも拘らず、参加者は各自で熱心に練習に取り組んだ様子で、皆上手にその成果を披露することができました。基本となる発音・アクセントに関しては非常に完成度が高く、上位入賞者の間ではさらに高いレベルで表現力を競う争いになりました。毎年のことですが今年も非常に接戦となりましたが、決め手となったのは、発音・アクセントのより自然な表現、滑らかさなどでした。結果は、第一位(優勝)箕浦直美さん(03M3031)、第二位鈴木まりさん(04J1298)、第三位菅生豊子さん(04J1374)となりました。

他の外国語に比べて参加者の数が少ないことが例年の課題となっていました。本年度はほぼ倍増となりました。もともとのドイツ語の履修者自体が他の外国語に比べると決して多くはない点を考慮するとこれは大健闘と考えられます。今後も

この傾向が続いてゆくように、何らかの形で工夫して、多くの参加者が集まるようにしたいと思います。毎年のように感心することですが、法学部・経営学部といった社会科学系の学部を中心とした愛知大学名古屋校舎で、これだけ熱心にそして上手にドイツ語を話せる学生がいるということは、ドイツ語の担当教員としてとてもうれしく思います。

実用という点では、英語や中国語などに比べて弱いドイツ語ですが、本学の学生の中には外国語の学習そのものを楽しむことが出来る学生が育っていることのあらわれではないかと思っています。

最後になりましたが、意欲的な学生の皆さん、語学教育研究室にかかわっている多くの教職員の方々のみなさんのおかげで今回もこのような意義のあるコンテストを続けることができましたことに、心よりお礼申し上げます。(島田 了)

フランス語部門

フランス語部門の本選は2005年11月25日(金曜日)に、国際コミュニケーション学部のラッセン教授を今年も審査委員長としてお招きして実施された。コンテスト出場者は8名で、例年に比べるとやや少なかったが、フロアには20名以上の聴衆を集めてにぎやかに行われた。

出場者が多い年は予選と決戦に分けて、予選通過者が決戦に臨むという形を取っていたが、今年は全員で予選と決戦を行った。予選ではシャルル・ペローの赤頭巾ちゃん(Le Petit Chaperon rouge)を事前に配布して当日朗読してもらい、本選では初見のシャンソンのNon, je ne regrette pas.を朗読してもらった。なお、参加者のうち、白鷺さんと飯田誓悟君は自作の作文を用意してくれたので、あわせてそれも朗読してもらった。

私は実は外国語コンテストには初めて参加させていただいたが、きわめてレベルの高いコンテストであることにすぐに気づいた。名古屋校舎での第2外国語の授業時間数から考えると、信じがたいほどしっかりした発音で、外国語をマスターす

るのは何よりも本人のやる気次第だということがよくわかった。各自がコンテストに向けて、あるいは普段から、いかに熱心に勉強しているかがうかがえた。

審査委員長のラッセン先生もどのように順位をつけるか苦労されたようだが、最終的には、以下のとおり入賞者が決まった。

第1位 03M3149 飯田 誓悟

第2位 04M3011 林 将希

第3位 02M3378 白 鷺

飯田君は正確な発音と同時に、立派なフランス語で書かれた自作の作文が高く評価されて、1位を獲得した。2位の林君は2年生ながら、先輩に勝るとも劣らぬしっかりした発音が評価された。白鷺さんは昨年より順位を二つ落としたとはいえ、3年連続しての入賞は賞賛に値する。その他、入賞はできなかったが、枠があれば入賞させてあげたかったほどのレベルの人が数名いた。

昨年から名古屋キャンパスのスタッフの一員として仕事をさせていただいているが、今回、コンテストに参加させていただいて、教育観が180度変わるほどの衝撃を受けた。昨今の学生は勉強しないと悪口ばかり言われるが、そんなことは決してない。学生諸君の潜在的な能力をどれだけ引き出せるか、そのために教師として何をしなければならぬか、答えは簡単には出ないが、改めて考えさせられた。2006年以降もぜひともこのコンテストを盛り上げていきたいと思う。(中尾 浩)

中国語部門(法・経営)

中国語コンテスト「法・経営部門」は、2005年11月17日(木)13時30分より205教室で行われました。全体の出場者は前回よりやや少ない36名でしたが、基礎部門には昨年を上回る学生が参加しました。また、今回は上級中国語クラスからの積極的な参加が目立ち、中国語に対する学生の熱意が感じられ嬉しく思いました。

例年同様、コンテストは課題文の朗読で行われました。基礎部門が「私の一日」と題する話で、

応用部門が「飲酒」という中国の笑い話でした。上級中国語クラスからの参加者が多かったこともあり、非常にレベルの高い競争になりました。厳正な審査の結果、次の3名が入賞しました。

- 1位 03M3057 松原 梨紗
- 2位 03M3323 服部 あや
- 3位 03SJ1064 神谷 健司

(鄭 高咏)

中国語部門 (現中)

第11回外国語コンテスト中国語現中部門は、2005年11月17日木曜日15時30分から、自由部門と課題部門の順で行われました。出場者は自由部門が4名、課題部門が14名でした。審査には、顧明耀先生と安部悟先生に加わっていただきました。

自由部門では、各出場者が自らの体験に基づいて中国語で作文したものを、情緒豊かに発表しました。厳正な審査の結果、次の1名が入賞しました。

- 1位 02C8002 鷲東 汐美

鷲東さんは、「小小的幸福 (小さな幸せ)」というタイトルで、アルバイトで知り合ったおばあさんとの出会いから、幸せとは身近にある些細なことから始まることに気づいた、と語ってくれました。

課題部門は、「中国人喜欢双数 (中国人は偶数好き)」という文章の暗誦でした。中国人は贈り物をするときや結婚に関するいろいろな場面で偶数を重んじるという内容で、少々難しかったです。出場者はみな頑張って暗誦しました。厳正な審査の結果、次の3名が入賞しました。

- 1位 05C8150 伊藤 えり
- 2位 05C8066 永谷 明香
- 3位 05C8082 成瀬 彩

(中川裕三)

韓国・朝鮮語部門

第11回外国語コンテスト「韓国・朝鮮語」本選は、'05年12月1日(木)午後2時開催。審査員2名(陶山信男先生、常石希望)に加え、'06年度から韓国・朝鮮語を兼任される田川光照先生もアドバイザーとして参加下さった。

参加学生は2年生を中心に40名。日頃の成果を堂々と発表し、その全体のレベル高さには、田川先生も驚いておられた。今回も審査は困難をきわめたが、以下の諸君が入賞となった。

- 1位 04J1375 田中 優貴 (たなか ゆうき)
- 2位 02J1372 小島 健志 (こじま けんじ)
- 3位 04J1244 丹羽 俊介 (にわ しゅんすけ)

しかし、次の諸君も入賞者に劣らない成績であったことを記しておきたい。

- | | |
|---------------|---------------|
| 04M3244 西村一騎 | 04M3066 西川一哉 |
| 04J1255 山本千尋 | 04J1281 森 淳二 |
| 04J1368 治根田夕希 | 04J1245 加重瑠子 |
| 04M3214 河内隆師 | 03C8101 森 美由紀 |
| 03J1071 水野 誠 | |

(常石希望)

日本語部門

外国語コンテスト「日本語部門」は、日本語を母語としない者を対象に開かれています。今年は「留学生の見た日本」というテーマで、自らの体験を盛り込み、身近な出来事から意見や考えを述べるのが課題でした。

法・経・現中三学部の1年生は伝統的に全員参加しています。60名近くにもなりますから予選を行います。予選で20名ずつに分かれた各クラスから3名の代表者が選ばれ、9名が本選に進みました。本選へは他の学年の誰でも出場できますが、今回は申し込みがなく、2005年11月17日、1年生8名で競うこととなりました(1名欠場)。

昨年はアルバイトを題材としたものが多かった

のですが、今年は多様でした。日本で見た環境問題を題材にしたものもあり、愛知万博の影響もあったのではないかと思います。イントネーション、間の取り方、アイコンタクトなど、聴衆との言語的・非言語的コミュニケーションを念頭にスピーチに取り組みました。どれも内容豊かで、聞き手を納得させるものでした。

審査は、教員2名(架谷・梅田)、学生審査員2名、聴衆約50名の投票によって行い、熱い空気の中、3名の入賞者が決定しました。

1位 05M3340 孫瑛英「日本人が教えてくれたこと」

2位 05M3341 王曉華「頑張ってね！」

3位 05M3338 孫逢敏「ステレオタイプ」

(敬称略)

最後に一言。日本人学生のみなさんはコンテスト日本語部門には参加できませんが、ぜひ一人の聴衆として留学生の声を聞きに来てください。きっと新しい発見があるはずです。(梅田康子)



外国語コンテスト入賞作



英語部門

第1位 My mamma

02M3378 Bai Lu

Hello, everyone. Have you thought of your mamma for real? I haven't. However, my mamma sometimes tells me that she would like to write a book about me when she retires from her company. Today I want to tell you about my mamma. She is an unusual mamma and she is an unusual woman as well.

First of all, I will tell you my unusual mamma. I say she is unusual because she doesn't do what a mamma is expected to do in the family. She doesn't have enough time to do much housework. At dinner time we often have to have a burnt fish, burnt meat or burnt vegetables because she has to answer phones, write letters, and think what happened in the day while cooking. Once, when she was putting oil into the can, she forgot it and the oil spilled from the can. So I hadn't been able to sleep well because of the smell of the oil for two weeks. When I was sick, she has never stayed with me or took me to the hospital, because she uses all the time on her work. And I also remember that when I was a junior high school student, she came to see my sports meeting and recorded it on the video. But afterwards at home we found that the girl she recorded wasn't me. You know, Japanese junior high school students all dressed the same.

Then, as a woman my mamma is unusual too. She doesn't work for the money but for her belief that China and Japan should have amity in the level of citizen. When I was three years old, my mamma passed the examination for a program promoted by Chinese government to send Chinese bachelor to study in Japan. Only two bachelors passed the examination, and my mamma was one of them. She studied in the post-graduate course at Tsukuba University. My mamma told me that when she first arrived at Narita Airport, she couldn't believe that Japan is so developed; for she read in the text book that most people living in the capitalism country like Japan were poor and exploited by the bourgeois. However, what my mamma saw was different. Since that time, she

decided to study hard in Japan and go back to contribute to China. And in the end, she chose the job dealing with Japan, when she thought the development of China can't be realized without the help of Japan.

Last of all, I would like to tell you that I bless her very much and I am proud of her no matter how unusual she is. I want to thank her for always talking to me like a friend, trying to understand me, believing me and never forced me to do anything. I also thank her to make me a good environment to study in Japan. I could spend my school life in the same way as Japanese students without feeling any difference. I assert that I spend my adolescence more beneficially in Japan than in China. I learnt not only the knowledge in the textbook but also the feeling of gratitude, tolerance, and, consideration.

I am going to study for another 2 years as a post-graduate student, I think I have found the aim of my life. I will find a job in Japan when I finish my master course, and I want to go to the United Nations after I have a lot of experiences of life and then I would like to do something for the whole earth. I can't say the present United Nations has a big power to treat every country fairly. Yet I think if more people will be liberal, the condition of this world will be better. This is what I feel through seeing my mama's job. I thank my mamma and I thank this speech contest for giving me a chance to consider a lot and present my thoughts to each of you here. I spend a very good time at Aichi University. These memories will with me forever. With these memories, I want to be an unusual woman like my mamma some day. Thank you for listening.

第2位 My first visit to Canada

04J1297 杉本 藍

When I was 17 years old, I went to Canada and stayed with a family who are acquaintances of my Japanese friend. It was my first visit abroad, so I was very happy when I got on a plane for the first time and arrived in Canada because I had really hoped to go abroad for a long time. My host mother and father of the family I stayed with greeted me happily at the airport. I was very nervous on the plane, but I felt

better immediately when I saw their smiles.

We drove home listening to foreign music and singing songs on their car and on a ferry. No sooner had we gotten home than a girl cheerfully came out of their home. She was Camille, 5 years old and the daughter of my host mother and father. She was a very cute and active girl and always came happily to me and asked me to play with her. I loved her, and miss her very much now.

I think you are all thinking that my stay in Canada was pretty good and fun. Yes!! You are right, but I hit the wall of language English. I thought I was good at English and could speak it easily before, but the truth was I couldn't understand their English at all as they spoke very fast. It was such a terrible shock to me that I tended to stay in my room alone because I didn't want to be spoken to by anyone.

But, my host family gently spoke to me and encouraged me not to be depressed. Even the very little girl, Camille encouraged me, too. They were always very kind and never got angry at me for saying nothing.

I noticed that they loved me so much even if I couldn't speak English well and I told them about things I felt. Then, I actively spoke to them, thinking it was important for me to speak in English to improve my English, even if it was terrible. Besides, I wanted to get a good relationship with my host family.

They willingly accepted me, and treated me as if I were a real member of the family. Because of them, I found that language is really important, but not as important as all of us think. Most of all, we should show much love and courage to improve our English. Don't be afraid of failure.

Now, I have a plan to go to Canada again and study English very hard for a year. Of course, I'll never forget the lessons I learned during my first stay in Canada. I advise all of you who hesitate to go abroad to study language that you should go with courage and study as hard as possible before you go not to have a

painful accident like me. I'm sure that you will find nothing is more precious than the experience.

Finally, I want to thank my host family who gave me a wonderful experience, my parents who allowed me to go to Canada, teachers who teach me English and everyone here who came to hear my speech today. Thank you very much.

日本語部門

第1位 日本人が教えてくれたこと

孫瑛英

皆さん、今日は。経営学部1年生孫瑛英と申します。よろしくお願ひします。今から、私が、外国人として、日本で聞いたこと、見たこと、感じたことを述べたいと思います。

ある日のことですが、初めて日本へ来た中国の料理人たちの歓迎会がありました。日本人の総料理長は、彼らの不安を取り除くために色々な話をしてくれました。その後、料理長は「ちゃんと見てね」と言いながら、左手にビールグラスを持ちました。するとすぐに、彼の助手はさっと近づいてきてビールを注ぎました。まるで、その時、二人は申し合わせたかのようにタイミングが合っていました。本当にびっくりさせられました。それから、料理長は、「中国と比べて、日本は小さい島国だから、中国人が気にしない事を日本人は気にするかもしれない。でも、日本での生活は、色々な事を細かく注意することさえ出来れば、大丈夫です。」と言いました。そのとき私は、この事は日本人の気配りのことを指しているのだと思いました。この気配りは、日本人の長所であり、他人を尊重することだと言えるでしょう。歴史から見ても、日本社会は個人よりも集団の調和を優先する社会です。個人主義を重んじる社会の人々にとっては、気配りすることがなかなか難しいですが、一旦日本の社会で生活することになれば、気配りも必要なのではないのでしょうか。

皆さん、日本で、中国人というだけで、誤解さ

れたことはありませんか。私は誤解されたことがあります。私が普段と同じように接客をしていると、一人のお客さんが私の名札を見るなり、「君、中国人なのかい」と聞いてきました。私が「はい」と返事をすると、「中国人、国へ帰れ、俺の金を払った飯を触るな。」と突然怒りました。また、店長に対しても「どうして中国人を雇用するんだ」と文句を言いました。普通、客に文句を言われたら、すぐ、謝ります。しかし、店長は「彼女はうちの従業員ですから、そんな酷いことを言わないでください。」と強く抗議してくれたのでした。その時、私は一人の外国人として、本当に無力であると感じました。その後、店長は、そのお客さんが中国人に対してとても悪い印象を持っているのを教えてくれ、私の接客ミスではないことを信じ、さらに、私の頑張りを認め、励ましてくれました。その瞬間、思わず涙が溢れて来ました。その涙はやり切れない思いというよりは感動から出たものでした。同じ日本人なのに、ある日本人は、私にとっても嫌な思いをさせ、またある日本人は、その嫌な思いをすっかり取り除いてくれました。確かに、文化や習慣の違いで、心の衝突が多いかもしれませんが、そこで仕方がないと諦めてしまうべきではありません。ただ自分の好き嫌いの気持ちだけでは、相手を本当に理解出来るとは言えないからです。例え国や文化や宗教が違っていても、人間は仲間同士だから、互いを許しあい、違いを認め合えば、いつか、きっと、暖かい心で満ちた世界を創れるのではないのでしょうか。

だからこそ、誤解されることは悲しいことではありません。それこそが、互いを理解しあう出発点になるのではないのでしょうか。日本人が、私たち外国人に心を開いてくれるためには、まず、私たち外国人が日本の文化や考え方をよく理解することから始まると思います。

ご清聴ありがとうございました。

第2位 頑張っってね！

王曉華

私は去年、桜が満開の季節に日本に来ました。4月1日、世話人と一緒に愛知大学留学生別科の入学式に参加しに、初めて学校に行った時、目に入ったのは春の太陽の輝きで見事に咲いているピンク色の桜でした。その桜を長い時間見て自分が今から日本での生活はどうかと考えていました。きっと大変だと思いますが、自信満々でした。

一番印象的なのは、エキサイティングな気持ちで初めての日本語の授業が終わった時、先生が「皆さん今日お疲れ様でした、これからもよく頑張っってね！」と挨拶したことです。皆さんも「はい！頑張ります！」と大声で返事しました。それは単純な挨拶じゃなくて、私にとって大切な言葉で心に残りました。ずっと今までその言葉を原動力にして歩いてきました。

ホームステイして毎日往復で4時間の通学生活をしていたから、時間が過ぎるのは早く、瞬間に夏休みを迎えました。1学期ずっと日本語の勉強をしていたので、夏休みの間はアルバイトをやると思って、ある土曜日の朝早く起きて自転車で道を回っているうちにあるお店の前に募集広告が貼ってあるのを見つけました。自信と笑顔を合わせて店に入って「すみません！私はアルバイトをしたいのですが今募集していますか」と聞いたら、お店の方は親切に「はい、募集していますよ！」と返事してくれました。あ～よかったと思っていたら、「はい、こちらにどうぞ」と案内されて席に座ると、いきなり面接のように話しかけてきました。ショックだったのは相手の話が20%しか分からなかったことです。もちろん回答もできなかったから、話も続けていけなくなってしまいました。お店の方は私のそのときのがっかりした表情を見て「日本語頑張っってね！」と言ってくれました。私は「はい！頑張ります！」と返事しました。

店を出て、負けない気持ちで探し続けていました。いくつかの店に入りましたが、同じ理由で断

られました。自信と笑顔は断られた回数でなくなってしまいました。依然としてまた自転車に乗っていて、気が付いたら迷子になりました。夜の街は人が少なくて怖かったです。道を聞きながらやっと家に着いたらもう夜11時になってしまいました。1日ずっと自転車に乗っていたからジーンズの後ろに穴が開いていました。

家に着いてまだ30分も経っていないうちに、国のお母さんから電話がかかってきました。電話の向こうから、一番かわいがってくれたおじいちゃんが二週間前にもういなくなったことが聞こえました。その時の気持ちは言葉には表せません。その夜は眠れませんでした。一日の疲れとおじいちゃんがいなくなった心の痛みが合わさって涙になりました。泣き止んだ後、ベランダに出て空の星を見て、初めて自分に「頑張っってね！」と言いました。

その時から「頑張っってね！」という日本語は私の一言になりました。何があっても、いつまでも忘れずに自分に言って、困難を乗り越えようと思います！

編集後記

よくカタログや雑誌の広告などで「写真はイメージです」という但し書きを見かける。この文言に違和感を覚えるのは私だけではないはずだ。もちろん、この日本語が意味していることは理解できる。ここに掲載した写真が、実際のその商品と必ずしも同種のもののそれではないということであろう。

だが「イメージ」とは、もしそれが英語の 'image' (正しい発音は「イミッジ」) のことであるなら、その原義は「(画)像」である。近年ではデジタル・カメラの普及によって、「イメージ」という単語が日本語の中でもこの元来の意味で使われることが多くなって来たようだ。英語の 'image' はラテン語の 'imago' が基になっているが、このラテン語が意味するのは「画像、類似、概念、外見、幽霊」などである。これらの意味をひとつの漢字で表すとすれば、当然「像」ということになるだろう。

「写真はイメージです」という但し書きを paraphrase すれば、「ここに掲載した写真はこの商品のたまかな＜概念＞を示すものであって、必ずしも実体を伝えるものではありません」ということになるだろうか。だが、くどいようだが 'image' の原義は「像」である。多少なりとも英語やラテン語の知識がある人に「写真はイメージです」などと言えば、それは「写真は画像です」という意味に理解され得るのだ。そうなるとその人は、写真は画像だよ、そんなことは言われなくとも分かっているさ、と言い返したくなるかもしれない。「写真はイメージです」というのは言い換えれば、「写真はピクチャーです」と言っているようなものなのである。

だが、このような曖昧な表現が、多くの人に「書き手の意図通りに」理解されていることも事実である。日本語というのは、そういう不思議な力を持つ言語なのだ。 (S.A.)